

よろず支援拠点あり方検討会
今後のよろず支援拠点の役割と支援のあり方
～10年間の歴史を踏まえて～

（株）アテナソリューション代表取締役
（一社）小規模企業経営支援協会代表理事
（独）中小機構よろず支援拠点全国本部アドバイザー
立石裕明

1. 10 年を振り返って

- 我が国の**中小企業・小規模事業者支援のインフラ**となり、「**経営相談に行こう**」という経営者意識改革が出来た。
- よろず支援拠点の相談者は。創業支援を含めると**小規模企業が8割**。
- 相談者の**満足度は96%**という驚異的数字となった。
- 他の支援機関と違って、検討を重ねて**47通りのやり方で良し**とした。
- 10年経って、公的支援機関として**地域に浸透**した。小規模企業支援は、公的支援機関しか出来ない。
- 国直轄の意義は大きい。迅速に喫緊の政策課題に対応出来る。**災害、震災時、特に力を発揮**してきた。
- 商工会。商工会議所、中央会等、**公的支援機関のハブ的役割**となっている。
- 中小企業活性化協議会、事業引継支援センターも3機関連携の観点からハブ的役割となっている地域が多い。
- よろずによって助けられた経営者は多い。私のあの時、よろずは無かった。
- よろずに関わり、**小規模企業経営者からの経営相談1000本ノック**を受けて支援能力が向上したと感じるCOは多い。
- よろずを卒業しその**地域で活躍している支援者が多数生まれている**。小規模支援を中心に1000本ノックを受け続けた支援者が全国各地に根付いてきた。この意義は大きいと考える。

2. 今後の役割

- 前述の通り、我が国の中小企業・小規模事業者支援のインフラとして、**財政支援を含めた機能を強化**していくべき。
- あらゆる支援機関、特に**公的支援機関の補完的役割**も重要。
- 10年間の相談者の傾向及び「よろず」という言葉からも、創業支援、伸びゆく企業の支援、苦しい企業の支援と全方向で進めるべき。
忘れていけないのでは、**よろずによって生産性向上が図られた企業が数多ある**ということ。
しかしながら、どんぶり勘定の小規模企業であるが故に、それを統計的に表せない。
- **中小企業庁の施策立案**における、**データ活用等のシンクタンクの役割**。
- **3 機関連携のハブ的位置づけ**（中小企業活性化協議会、事業引継支援センター、よろず支援拠点）

• 伴走支援の観点から

- ➡ **基礎的経営支援の充実を図り**
- ➡ **上から目線ではなく「支援者育成」「経営者育成」に力を注ぎ**
- ➡ **経営者の方々への「経営意識」を定着させ**
- ➡ **どんぶり勘定からの脱却を促し**
- ➡ **国の政策課題に対応し、生産性向上を推進する場**にしていこうと考えている。

3. 支援のあり方

- ・当たり前だが、**苦しい企業の支援のみならず、伸びゆく企業の支援、両輪の支援**で進めていく事は大前提。

- ・円滑な廃業支援と再チャレンジについて

中小企業政策審議会 中小企業・小規模事業者政策基本問題小委員会でも議論しているが、この「**円滑な廃業**」の推進および、

再チャレンジ支援にも注力すべきだと考える。

- ・「**対話と敬聴**」を主とした、「**伴走支援**」の土台作りを再認識し、**経営者の気持ちに寄り添い支援**していく。

4. 運営のあり方

- ・**47 通りのあり方は維持**すべきと考える。

- ・現時点においては、**無償の公的支援機関**であるべき。

代位弁済が急増する中、円滑な廃業、再チャレンジ出来る社会の構築と言う視点からも推察できる。

- ・10 年間、この 3 機関連携（中小企業庁、中小機構、実施機関）が重要だと思ってきた。改善すべき点はあるとは言え、その時々で改善を進めてきた。地域差があるので**運営における実施機関の更なる協力が重要**と思われる。

- ・予算の問題はあるが、専門家活用等、**県を超えた連携強化**も重要となってきた。